

二重口縁壺小考(下)

利根川 章彦

5 北陸・東北地域の二重口縁壺

二重口縁壺の地域性について本節以降で各論的に触れてみたい。まず、関東以北の土器を取り上げる。土器の系統性があると思われる北陸地域と東北南部の主な二重口縁壺を適宜ピックアップして述べてみたい。

装飾壺の範疇にあるものに石川県加賀市小菅波4号墳の一群がある(註1、第1図1~4)。ここには、庄内式系統の二重口縁壺2点とややノーマルな二重口縁壺2点が共伴している。この土器群は形態・手法上の特徴から庄内式(新)段階に位置付けられている。庄内式系統の二重口縁壺には、口縁部外面・口唇部内面・胴部上半外面に櫛描波状文、口縁部下端外面に竹管円形浮文をもつ1と、櫛描波状文が欠失して、口縁部下端に3個1単位の竹管円形浮文が4単位貼付される2がある。1は口唇部成形 $\delta-1$ 型、2は $\delta-2$ 型である。

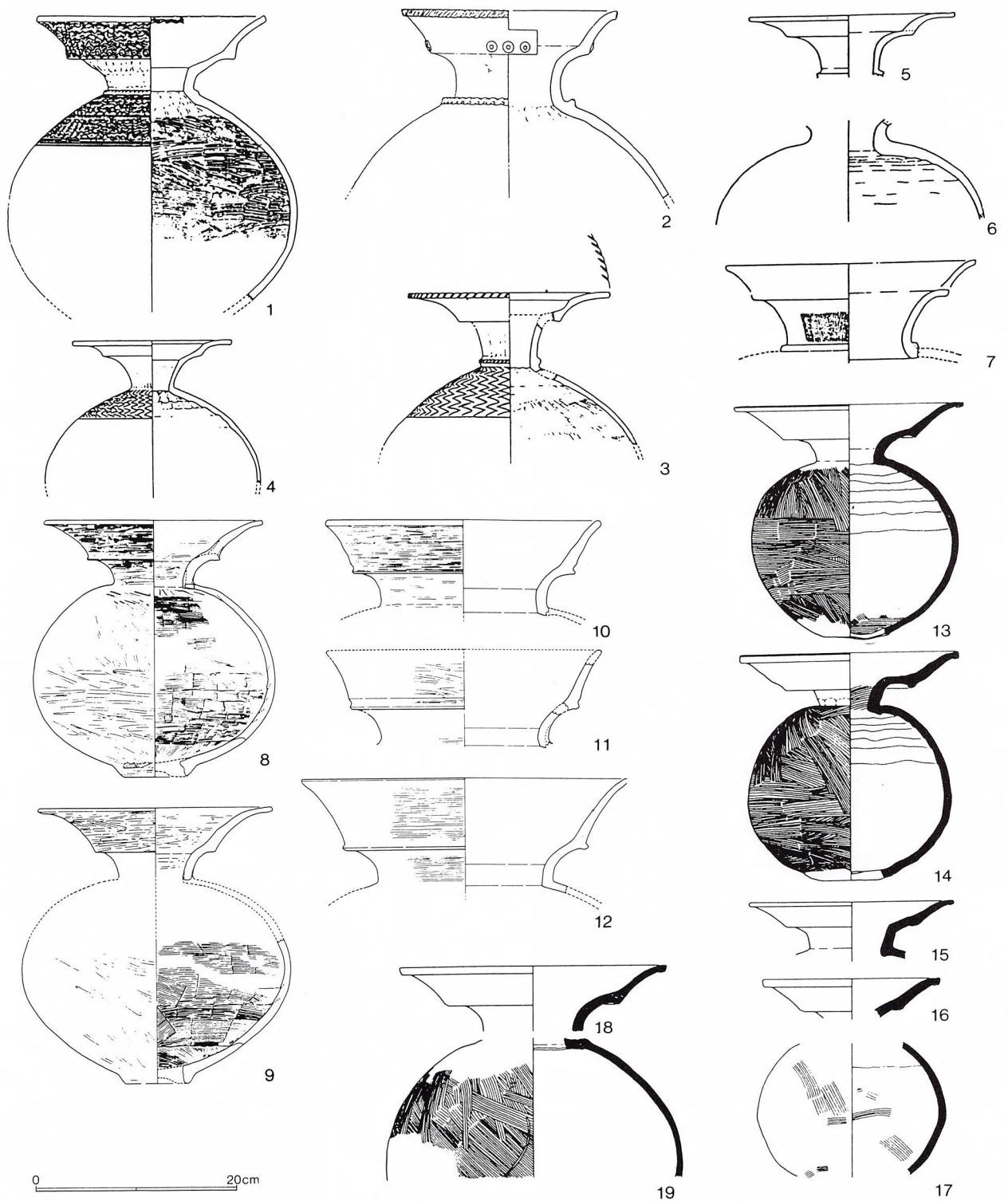
一方、ややノーマルな二重口縁壺も装飾壺である。2点とも胴部上半に5~6段の羽状文が施される。3は頸部下端に刻み目のある突帯をもち、口唇部端面から内面にかけて規則的な刻みをもつ。双方とも細頸でやや長い頸部になる。また、口縁部は外反度が大きく、口縁部成形は $\delta-2$ 型である。

この後に述べる各古墳の資料と共通するのがこの長い細頸と口縁部外反が大きいことである。

次に、石川県七尾市国分尼塚1号墳(註2)の壺を取り上げる。二重口縁壺は2点あり、無文化しているが、口縁部から頸部の器形の特徴が小菅波例に類似するものを含む(第1図5)。口縁部接合a-3手法、口唇部成形 $\gamma-1$ 型である。布留式(古)段階のやや新しい一群と考えられている。やや頸の太い二重口縁壺もあるが、この壺は口唇部を欠失しているので判然としないが、 γ 型の口唇部を想定されているようである。

石川県羽咋郡押水町宿東山1号墳(註3)も二重口縁壺がかなり多く出土しているが、ここでは明瞭に二形態ある。口縁部を大きく外反させる一群(第1図8・9)と、口縁部の外反度が弱い大型の一群(第1図10~12)がある。前者は小菅波・国分尼塚例に近い特徴をもつもので、口縁部接合a-3手法、口唇部成形 $\gamma-1$ 型である。8は底部焼成後穿孔である。後者は頸部が太く、口縁部下端に沈線を入れるように成形する特徴をもつ。口唇部成形は $\gamma-1$ 型である。これらは山陰系に近い特徴をもつ壺であろう。やはり、布留式(古)段階のやや新しい一群と考えられている。

富山県小矢部市関野1号墳にも多くの二重口縁壺がある(註4、第1図13~19)。この古墳の壺は細頸の傾向を残しているが短頸であり、口唇部は $\delta-2$ 型になっている。畿内系二重口縁壺を忠実に受容した作りに変わっており、布留式(中)段階の古い一群と考えられている。



第1図 北陸地域の二重口縁壺 (縮尺1:6)

1~4 加賀市小菅波4号墳 5~7 七尾市国分尼塚1号墳
 8~12 押水町宿東山1号墳 13~19 小矢部市関野1号墳

これらから北陸系の特徴を整理しておくとして、細頸で口縁部の外反度が強いことが最も顕著で、頸部突帯をもつことも多い。この細長く外反度の大きな口縁部は月影式土器の高杯の坏部形態などに祖型を求めることができるかもしれない。そして、時間的推移の中で畿内化していくものと、山陰系の特徴を残すものに分かれていくようである。

東北地域の場合には、二重口縁壺の出現期がやや新しい段階に下降するため、複数地域の土器の

系統を受容している。基本的には北陸系と強い関連性をもつものと、関東を経由した形で畿内・東海系を受容するものに分かれているようである。以下にいくつかの具体例を示そう。

宮城県仙台市安久東遺跡1号墓(註5、第2図1)・名取市今熊野遺跡1号墓(註6、第2図2)からは、やや長頸になって口縁部がやや強く外反する二重口縁壺が出土している。作りの上からは安久東例の方が口縁部下端の有段部分が明瞭で、やや古相と考えられる。双方とも口唇部成形は γ 型でやや β 型傾向になるものもある。安久東例は栃木県那須郡湯津上村下侍塚古墳の壺(註7、第2図6)に近い特徴をもつ。今熊野例は宮城県名取市雷神山古墳の壺(註8、第2図3～5)に類似する。安久東例は布留式(中)段階直前か(中)段階の初期あたりで、今熊野例は布留式(中)段階と考えられるものであろう。

これらの中では雷神山古墳の壺が最も外反度の強いもので北陸系に近いが、それ以外の3例はむしろ「伊勢型二重口縁壺」の変形と考えるべきかもしれない。

これに対して細頸になるものに山形県東置賜郡川西町天神森古墳の壺(註9、第2図7～9)がある。これは、口唇部成形 $\delta-2$ 型で、口縁部の外反度も一段と強い。明らかに北陸系の変形になる壺である。これも布留式(中)段階から(新)段階にかけての時期を考えられよう。

福島県双葉郡浪江町本屋敷1号墳(註10、第2図10～12)にも数種類の二重口縁壺があるが、前述の一群に近い作りのものではない。頸部が短頸・直立気味の形態で畿内系二重口縁壺のやや新しい形態とみてよいものである。口唇部が外に肥厚しながら面を作る δ 型の変形、 $\gamma-1$ 型、 $\gamma-2$ 型の口唇部成形になるものがある。その他、会津地域で最近出土している二重口縁壺、たとえば男壇遺跡・宮東遺跡・杵ヶ森古墳などのものも基本的には畿内系壺になる。会津地域は、集落遺跡出土土器まで含めて考えるならば、北陸系の甕・装飾器台なども目立つが、壺類に関する限り、北陸の地域色は濃いとはいえず、畿内・東海的な土器の方がかえって多いように見受けられる。北陸系土器と東北地域の関係を考える際には、福島地域については特に注意を払う必要がある。

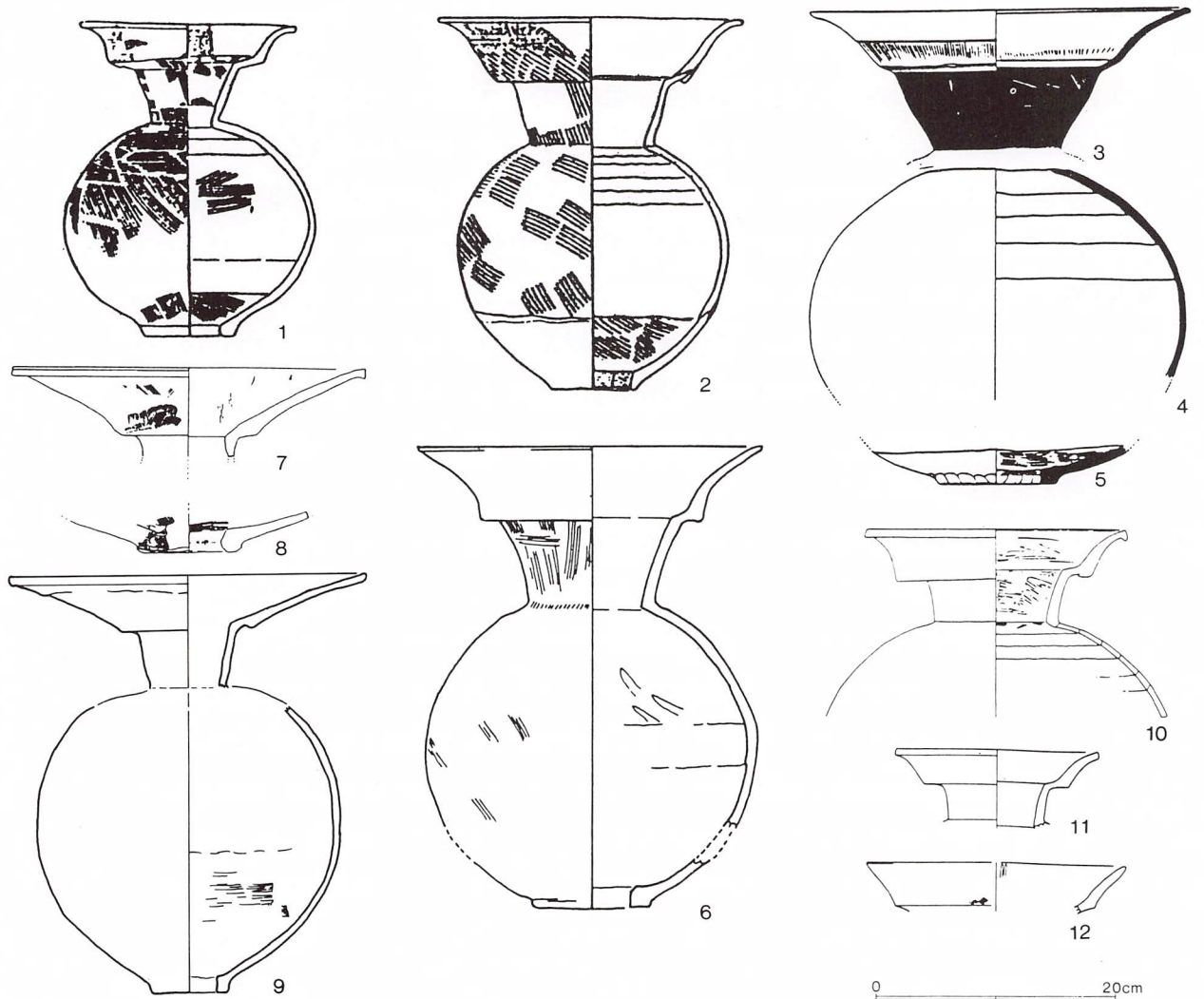
6 山陽・山陰地域の二重口縁壺

次に、中国地方を取り上げる。ここでは日本海側の出雲を中心とする山陰地域と、瀬戸内海沿岸の吉備を中心とする山陽地域との地域色が明瞭であると思われるので、関連する部分を除いて別々に取り扱う。

まず、山陰地域を見ておきたい。この地域における弥生土器からの系統の壺の特徴である、頸部への綾杉状の刻み目・木口状工具の刺突の施文が顕著な地域色となっているが、口縁部の作りも特徴的である。

鳥取県倉吉市上神猫山3号墳墓(註11、第3図1・2)には底部穿孔壺2点を含め、5点以上の二重口縁壺がある。このうち4点には頸部と胴部の境に太い突帯をもつ。2点には胴部上半に木口状工具の刺突による綾杉文がある。口縁部接合 $a-2$ 手法、口唇部成形は δ 型になるが、つまみ出しが強めで口唇部が反り返るものもある。口縁部の外反度は山陰系の中では大きい方だが、北陸系などに比較すると特別大きいわけではない。布留式(古)段階に位置付けられている。

鳥取県米子市青木遺跡F S X 03の壺(註12、第3図3)は長胴形態になっている。口唇部成形 δ



第2図 東北地域の二重口縁壺 (縮尺1:6)

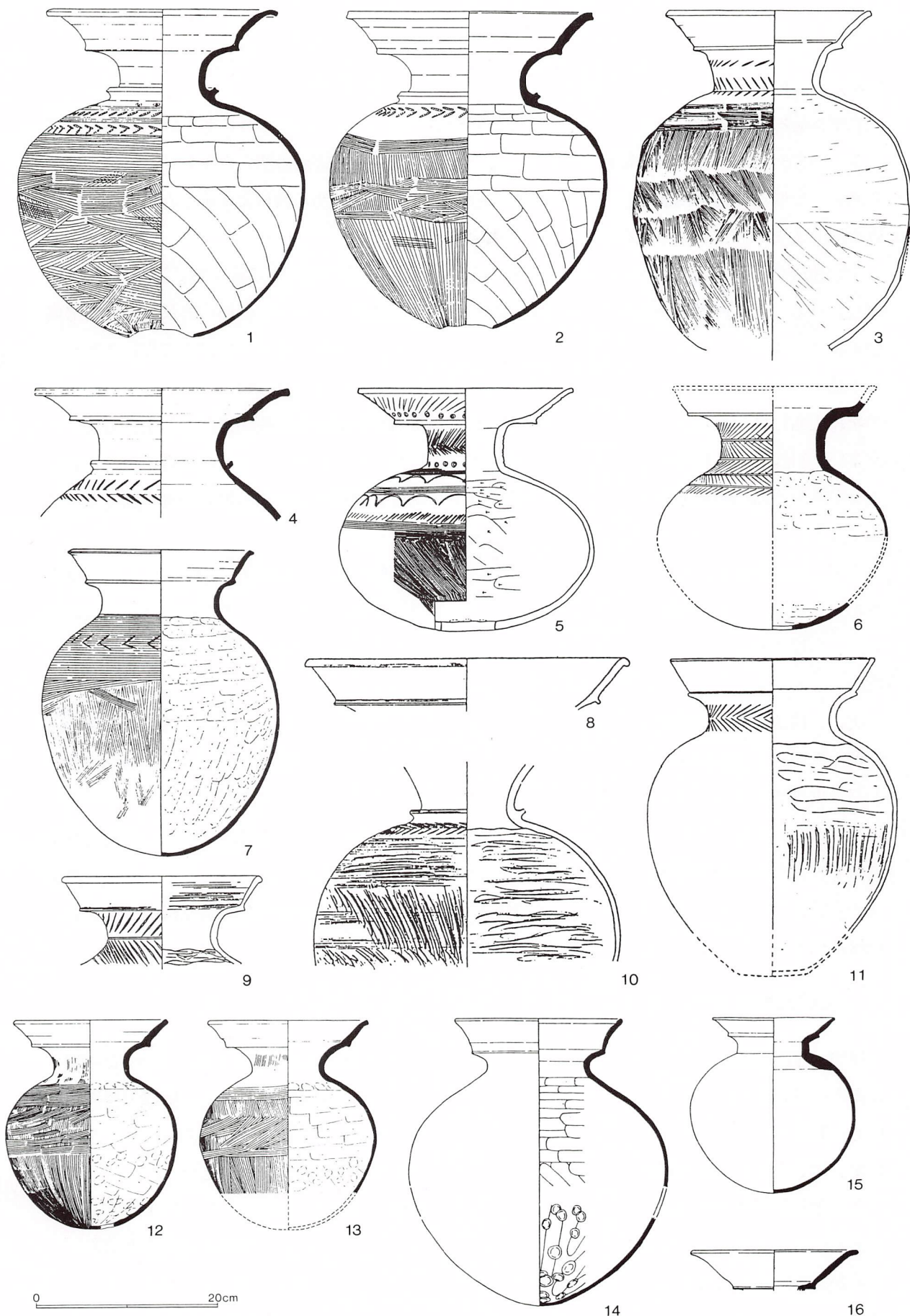
- 1 仙台市安久東遺跡1号墓 2 名取市今熊野遺跡1号墓 3~5 名取市雷神山古墳
6 栃木県下侍塚古墳 7~9 山形県天神森古墳 10~12 福島県本屋敷1号墳

— 1型、口縁部接合b手法で、頸部と胴部上端にヘラによる刻み目の綾杉文がある。布留式(古)段階に位置付けられているが、共伴する鼓形器台の変形からは上神猫山例より新しいと思われる。

鳥取県東伯郡東郷町佐美4号墳の壺(註13、第3図4)は頸部突帯をもち、胴部上端に刻み目の綾杉文を施す。口縁部は上半がやや強めに外反し、口唇部成形は δ 型である。布留式(新)段階とされている。

鳥取市面影山74号墳の壺(註14、第3図5)も底部穿孔の二重口縁壺である。この壺は山陰系の中でも最も装飾性の強い壺で、口縁部下端と頸部下端に竹管スタンプ文、口縁部に斜放射状の刻み目文、頸部に綾杉状刻み目文、胴部上半に横線文—連弧文—横線文—連弧文—斜めの刻み目—横線文という文様帯をもつ。胴部中位から下半には一面に刷毛目が施される。口唇部成形は δ 型。布留式(新)段階とされている。

鳥根県大原郡加茂町神原神社古墳(註15、第3図6・7)には、頸部に綾杉文が羽状に重畳する壺と、胴部上半に幅広の横線文があり、その中に綾杉文が施されている壺の2点がある。前者は口縁部下半から上が欠失しているが口縁部の外反度がやや小さく、口唇部成形 δ 型になるようである。後者はやや長胴であり、口唇部は外側に肥厚し、 δ 型に近い γ 型になる。布留式(古)~(中)段



第3図 山陰・山陽地域の二重口緑壺 (縮尺1:6)

1・2 倉吉市上神猫山3号墳墓 3 米子市青木遺跡跡FSX03 4 東郷町佐美4号墳 5 鳥取市面影山74号墳 6・7 加茂町神原神社古墳 8~11 三刀屋町松本1号墳 12・13 丹後町神明山古墳 14 損保川町権現山51号墳 15 倉敷市金蔵山古墳 16 神戸市西求女塚古墳

階あたりに位置付けられている。

島根県飯石郡三刀屋町松本1号墳（註16、第3図8～11）にも5点以上の二重口縁壺が出土している。頸部突帯と胴部上端の綾杉文を有する壺を1点含むが、口縁部の明らかな壺はそれ以外に3点ある。口唇部は外側に肥厚し、 γ 型の成形になる。2点には頸部に綾杉文が施される。口縁部の外反度はあまり大きくない。布留式（古）段階とされている。

山陰地域に地続きの京都府竹野郡丹後町神明山古墳（註17、第3図12・13）にも二重口縁壺2点が知られる。この古墳の壺は胴部が刷毛目調整になるが、頸部の湾曲・口縁部の外反度・口唇部成形 δ 型でつまみ出し気味の作り・口縁部接合a-2手法などの特徴が前述の山陰系の壺と共通し、鼓形器台を伴うことなども山陰的である。布留式（新）段階に位置付けられる。

次に山陽地域である。ここには岡山市川入遺跡・上東遺跡や岡山市百間川遺跡など集落遺跡の例が多い。口縁部の外反度がやや弱く、口唇部成形 γ 型になるものが多い。有名な倉敷市酒津遺跡の壺など弥生土器の系統を継承する二重口縁壺も顕著である。本稿では古墳・墳墓の例を取り上げておく。

まず、兵庫県揖保郡揖保川町権現山51号墳の壺（註18、第3図14）を取り上げる。この古墳は特殊器台型埴輪・三角縁神獸鏡の出土でも知られる。壺は後方部出土らしい。突出底気味の丸底に作られ、口縁部接合a-2手法・口唇部成形 γ 型（つまみ出し気味）である。おおむね布留式（古）段階と思われる。

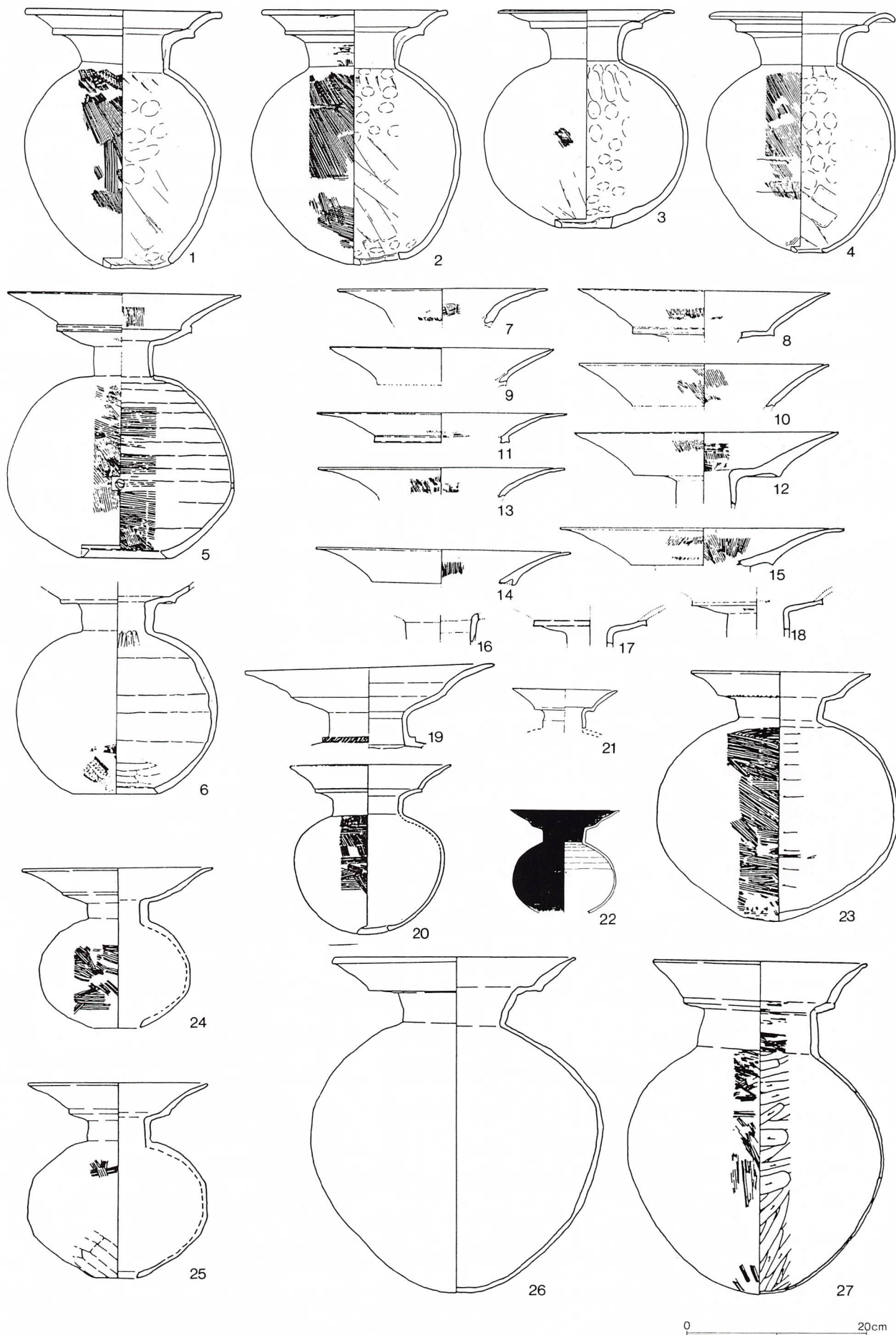
次に、岡山県倉敷市金蔵山古墳の壺（註19、第3図15）である。この壺は短頸で口縁部下端の屈曲がややゆるく、新しい段階に位置付けられるものであろう。口唇部は外につまみ出し気味になり、 γ 型の成形となる。布留式（新）段階になると思われる。

神戸市西求女塚古墳も最近三角縁神獸鏡の出土が知られるようになった古墳である。竪穴式石室周辺から二重口縁壺が出土している（註20、第3図16）。口縁部のみであるが、頸部との接合の状況から細頸で直立形態の頸部であろう。口縁部の外反度はやや大きい、口唇部成形は $\gamma-1$ 型、口縁部接合a-2手法で山陰系に近い特徴をもつ。

7 北部九州地域の二重口縁壺

四国・九州の各地にも二重口縁壺は散見される。しかし、発掘調査による出土例については福岡・佐賀の二県が群を抜いて多い。そこで、本稿では四国はとりあえず除外して考え、福岡・佐賀県を中心に北部九州の事例を取り上げておく。もちろん四国の地域色の問題を軽視しているわけではないが、北部九州の二重口縁壺の方が畿内を遠ざかっている分だけ特徴的であると思う。

この地域には佐賀県地域を中心に庄内式系の二重口縁壺が目立つ（註21）。ここでは紙数の限定もあるので、庄内式系は除外し、布留式系の二重口縁壺のみ取り扱う。発掘調査の頻度の問題にもよるが、福岡県の筑後地域に二重口縁壺の出土例が多い。特に、小郡市三国の鼻1号墳（註22、第4図1～4）・津古生掛古墳（註23、第4図5～18）は墳丘上に壺形埴輪同様に立て並べたのではないかと思われるほど多くの個体を検出している。また同じ台地上にある津古2・3号墳（註24、第4図19）にも1点出土例がある。三国の鼻1号墳例は口唇部成形 $\gamma-2$ ・3型になるものが多く、



第4図 北部九州地域の二重口縁壺 (縮尺1:6)

1~4 小郡市三国の鼻1号墳 5~18 小郡市津古生掛古墳 19 小郡市津古2・3号墳 20 久留米市祇園山古墳 21 筑紫野市阿志岐B-22号墳 22 福岡市藤崎1号墓 23 甘木市平塚大願寺方形周溝墓 24・25 佐賀県松の森遺跡SD19 26 多久市撰分遺跡SB012 27 甘木市池の上3号墳

一部 α 型傾向・ β 型傾向のものを含む。頸部は直立気味で短頸だが、胴部がやや間延びした形態を呈し、新しい時期の土器と考えてよい。布留式（古）段階の最新期から（中）段階にかけての時期であろう。これに対して、津古生掛古墳、津古2・3号墳の壺はほとんどが β 型の口唇部成形になる。同じ台地上の遺跡群に属することを考えるとこれらは確実に新旧関係になる。津古生掛例、津古2・3号墳例は布留式（古）段階になると思われ、 $\beta \rightarrow \gamma$ と口唇部成形が変化すると考えることができる。ただし、筑後地域の二重口縁壺は擬口縁部（口縁部下端）の作りや胴部・頸部の形態が特徴的である。擬口縁部は段を明瞭に作るか、下端部外面をやや内湾させて作る。頸部は細めに円筒状に作るが、新しい段階になると短頸で太めになる。頸部と胴部の境には突帯がつく例もあるが、さほど多いというわけでもない。

これらの特徴のうち最も顕著なのが、「口唇部成形 β 型」ということになる。 β 型の例をあげておくと、久留米市祇園山古墳（註25）、筑紫野市阿志岐古墳群B群22号墳（註26）、福岡市藤崎遺跡1号墓（註27）、甘木市平塚大願寺遺跡方形周溝墓（註28）、佐賀県神埼郡東背振村松の森遺跡S D 19溝（註29）など数多い。いずれも布留式（古）段階におおむね位置付けられる。しかし、口唇部 γ 型になる壺もこの時期には登場している。また、布留式（中）段階に下降する壺にも、口唇部成形 β 型あるいは β 型の名残りでつまみ出し気味成形をするものが多い。 β 型の例には佐賀県多久市撰分遺跡S B 012住居跡の壺（註30）があり、 β 型的つまみ出し口唇部になるものには福岡県甘木市池の上墳墓群3号墳の壺（註31）がある。

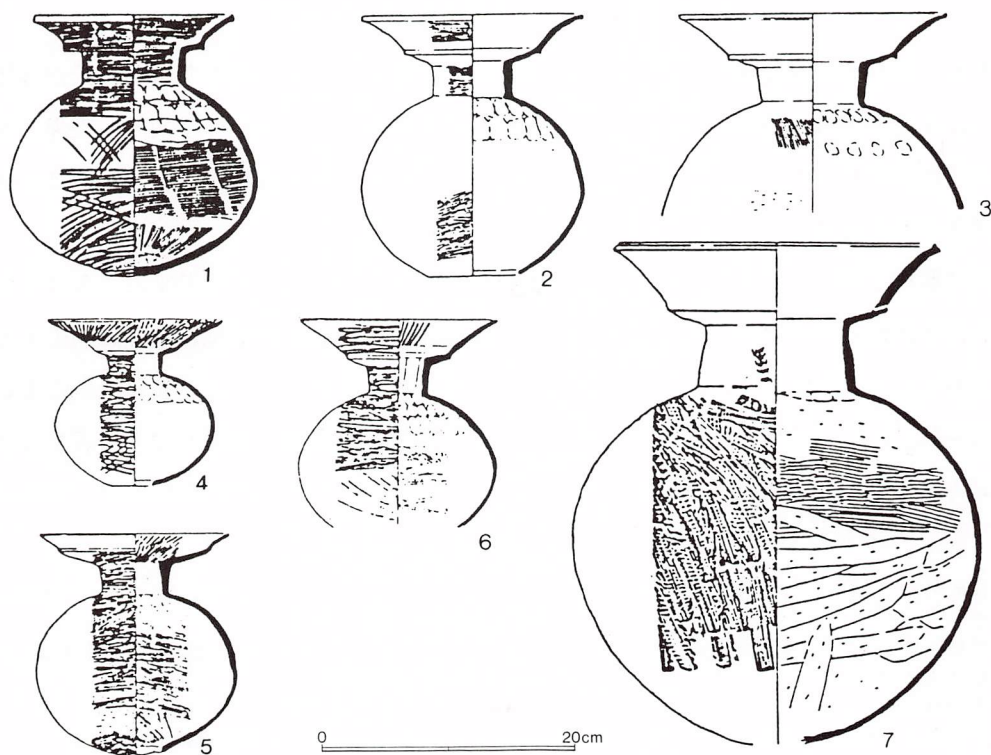
北部九州には、庄内式の突出底甕や布留式の丸底甕などの系譜にある土器を畿内から受容する傾向（註32）も顕著であり、二重口縁壺も割合ストレートに受容して作っていると考えやすいのであるが、口唇部成形を主体に考えると、畿内の古い段階に多い α 型が主体になることはなく、 β 型・ γ 型主体となる。ここでは、特に β 型が顕著であることを地域色として考慮しておきたい。

8 二重口縁壺の系統と時期に関する問題

小稿では土器の時間軸上の新旧関係や地域性に関する細かな分析を意図的に省略してきたが、本章ではこれらについて若干の言及をしておきたい。

二重口縁壺は型式学的組列として畿内系（庄内式系、布留式系）、東海西部系他に、北陸系・山陽系・山陰系・北部九州系を含む。これらの地域的な土器の系統は同時多発的に各地に展開するが、二重口縁壺の祖型が畿内地域にあることはほぼ間違いない。他の各地域の壺は畿内系を起源としながらもこれに対して地域色を残すことがほぼ確実である。

たとえば、口縁部・口唇部の成形を取り上げよう。山陽系壺は、口縁部の外反度が弱く、口唇部成形も緩い面を作る γ 型である。山陰系も γ 型主体であるが、口唇部が外側に肥厚する例が多く、口唇部が外側に面をもつ δ 型もある。北部九州系は全体的に口縁部を長く引き出し、口唇部を尖らせる β 型主体であり、口唇部を丸く作る γ 型がそれに次ぎ、 δ 型も少数ある。北陸系は口唇部 γ 型が多いが、口縁部全体を長く大きく外反させることが特徴的である。東北の二重口縁壺は北陸系の土器を變形するか、畿内系・東海系土器を関東的に變形させたものを取り入れるように見受けられる。



第5図 大阪市加美遺跡の壺の変遷 (縮尺1:6)

- 1 2号墓〔庄内式(古)〕 2・3 3号墓〔庄内式(新)〕 4～6 14号墓〔布留式(古)〕
7 39号墓〔布留式(中)〕

これらの特徴は、畿内の土器の影響を直接受けたために成立したというよりも、各地域の弥生土器の伝統を継承していたり、各地域特有の変形であったりする。

一例をあげよう。庄内式(新)段階から布留式(中)段階までの二重口縁壺を出土した遺跡に大阪市加美遺跡(註33、第5図)がある。この遺跡では口唇部成形が、庄内式(新): $\alpha-1$ 型→布留式(古): β 型→布留式(中): $\alpha-2$ 型と変遷しており、 δ 型は少ない。この傾向は奈良県や京都府など畿内各地域に共通する。

これに対して、すでに述べたように北部九州では β 型が多い。関東では畿内の変化に比較的忠実そうに見えるが、意外と δ 型が多く、北部九州的 β 型もかなりある。市原市神門3号墳(註34)や東松山市下道添遺跡2号墓(註35)の壺もこの北部九州系列として理解できるかもしれない。

また、関東では頸部が外傾する「伊勢型二重口縁壺」が多く出土し、関東全域で確認できるが、同じ土器の他の部位の特徴や相伴土器の様相などからは畿内・東海の折衷型として理解すべきものも多い。関東の二重口縁壺受容時期の主体がやや新しい時期にあることを示していると考えたい。

9 おわりに——関東地域の二重口縁壺の地域性——

以上の考察によって、古墳時代型二重口縁壺と本稿で呼称した有段口縁の壺にもいくつかの系統があることが再確認されたと思う。つまり畿内系にも庄内式系の残存形態と布留式の壺の二形態があり、東海西部系の変形によるもの、山陽・山陰系など各地域の個性的なものもやや新しい時期まで系統を残していく。関東地方の二重口縁壺はおおむね東海西部系統の土器であることも判明したが、これは基層文化としてこれらの地域の習俗・生活などを継承したためで、決して派遣将軍のような特定小集団の作り出したものではない。

もちろん、小集団の移住論のすべてを葬り去ろうとは思わないが、最近友廣哲也氏が詳細に指摘したように群馬県全域に過渡的土器様相として弥生後期の樽式系の土器群と畿内・東海・北陸系土器群の共伴例が認められている(註36)。そういう素地のもとに畿内・東海系土器の色彩を強くもつ石田川式期の集落遺跡が出現したらしい。

小稿では器種を限定して立論したため、古墳時代の社会状況について関説することは必要最小限の記述を除き回避してきたが、将来的には小型土器・甕類などを含めて東日本の該期の土器様相と集落・古墳などから考えられる社会状況について詳説したいと考えている。なお、かつていわゆる「古墳出現期」について概括的に述べた機会に壺形土器の問題を別に論考として発表すると書いておいたが(註37)、小稿でその一部を果たした。もう少し総括的考察が必要であるが、別稿に譲りたい。

- (註1) 田嶋明人 1988 「小菅波4号墳」『第24回埋蔵文化財研究集会 定型化する古墳以前の墓制』埋蔵文化財研究会
- (註2) 宇野隆夫 1989 「国分尼塚1号墳」『第25回埋蔵文化財研究集会 古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』埋蔵文化財研究会
- (註3) 北野博司他 1987 『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- (註4) 宇野隆夫・小田木治太郎他 1987 『関野古墳群』小矢部市埋蔵文化財調査報告書第19冊
- (註5) 土岐山 武他 1980 「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告Ⅳ』宮城県教育委員会
- (註6) 丹羽茂 1985 「今熊野遺跡Ⅰ」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県教育委員会
- (註7) 大金宣亮 1976 『下侍塚古墳周濠発掘調査概報』湯津上村教育委員会
- (註8) 恵美昌之 1977・1978 『史跡雷神山古墳』名取市文化財調査報告書第3・5集 名取市教育委員会
- (註9) 加藤稔・藤田宥宣 1984 『天神森古墳発掘調査報告書』川西町埋蔵文化財調査報告書第6集
- (註10) 伊藤玄三・星野達雄他 1985 『本屋敷古墳群の研究』法政大学考古学研究室
- (註11) 真田広幸 1980 『上神猫山遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
- (註12) 清水真一他 1976 『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』鳥取県教育委員会
- (註13) 萩本勝他 1980 『佐美4・13号墳発掘調査報告書』東郷町教育委員会
- (註14) 鳥取市教育委員会 1987 『面影山古墳群・吉岡遺跡発掘調査概要報告書』
- (註15) 前島己基・松本岩雄 1976 「島根県神原神社古墳出土の土器」『考古学雑誌』第62巻第3号
- (註16) 山本清他 1963 『松本古墳調査報告』島根県教育委員会
- (註17) 平良泰久・黒田恭正・常磐井智行他 1983 『丹後大山墳墓群』丹後町教育委員会
- (註18) 松本正信 1984 「龍野市とその周辺の考古資料」『龍野市史』第4巻 龍野市
- (註19) 西谷真治・鎌木義昌 1959 『金蔵山古墳』倉敷考古館
- (註20) 神戸市教育委員会 1988 『昭和60年神戸市埋蔵文化財年報』
- (註21) 蒲原宏行 1989 「北部九州出土の畿内系二重口縁壺」『古文化談叢』第20集 発刊記念論集(中) に多くの事例が紹介されている。
- (註22) 片岡宏二他 1985 『三国の鼻遺跡Ⅰ』小郡市文化財調査報告書第25集 小郡市教育委員会
- (註23) 宮田浩之他 1988 『津吉生掛遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第44集 小郡市教育委員会
- (註24) 片岡氏前掲(註21)書
- (註25) 橋口達也 1979 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XⅩⅦ』福岡県教育委員会
- (註26) 前田義人 1982 『阿志岐古墳群』筑紫野市文化財調査報告書第7集 筑紫野市教育委員会
- (註27) 浜石哲也・池崎謙二 1982 『藤崎遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集 福岡県教育委員会
- (註28) 柳田康雄 1984 「平塚大願寺遺跡」『甘木市史資料』考古資料編 甘木市
- (註29) 西田和己 1983 『松の森遺跡』佐賀県文化財調査報告書第70集 佐賀県教育委員会
- (註30) 西村隆司他 1987 『撰分遺跡』佐賀県文化財調査報告書第87集 佐賀県教育委員会
- (註31) 橋口達也 1979 『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告書第5集 甘木市教育委員会
- (註32) 蒲原氏前掲(註20)論文に多くの事例が解説されている。
- (註33) 田中清美 1986 「加美遺跡発掘調査の成果」『古代を考える 43 加美遺跡の検討』古代を考える会
- (註34) 浅利幸一 1989 「神門3号墳」『市原市文化財センター年報』昭和62年度 市原市文化財センター
- (註35) 坂野和信 1987 『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (註36) 友廣哲也 1992 「群馬県古墳文化初頭期の検討」『古代』第94号 早稲田大学考古学会
- (註37) 利根川章彦 1991 「いわゆる古墳出現期認識の方法について」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団10周年記念 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

なお、本稿に関連する口頭報告として1991年10月26日の法政考古学会第75回例会で『二重口縁壺と前期古墳—いわゆる「古墳出現期」および古墳時代前期前半の土器様相—』を行っている。報告の機会を与えてくださった伊藤玄三先生はじめ法政考古学会会員諸氏諸嬢、仲介の労をとっていただいた丸山理氏に深謝したい。